

佳作

変わらないもの

鴻巣市立鴻巣西中学校 2年

山田 夏菜乃

私は、この夏休みに、あるボランティア活動に参加しました。それは、あしたばポプラ作業所という障害のある人たちが働く場所です。この施設は、そのような人たちが地域の中で生きがいを感じながら生活できる場所でもあるそうです。私は、この場所で学んだことがあります。

あしたばポプラ作業所では、障害のある人がダンボールに付いているガムテープを外していたり、商品をモールで飾りつけていたりしていました。皆んな会話をしながら自分のできる事をしっかりとこなしていました。また、働く人は、ニコニコと楽しそうに過ごしていて、仕事の疲れを一ミリも感じさせない素敵な笑顔でした。同じ事を何度も何度も繰り返すという作業は、一見簡単なことのように見えますが、実際にやってみると思った以上に疲れてしまいます。私は、約一時間体験してみたのですが、手が途中から重く感じて笑顔でいる余裕がなかったです。そんな中、相手に気を遣いながら、笑顔を保ちながら作業をしている目の前の人たちに私は感動し、尊敬しました。

また、私は、この場所でとてもうれしかったことがあります。それは、廊下ですれ違ったとき、必ずこんにちわとあいさつをしてくれたことです。きっと二時間の間でこんなに明るいあいさつをもらったのは、私にとって初めての出来事だったでしょう。どのあいさつも、優しく、軽やかなメロディを奏でていました。私は、あいさつされる度に、心が浄化され、気持ちのよい気分になりました。

私は、この体験をしてみて、分かったことがあります。それは、障害のある人は、障害のない人と心は変わらないということです。障害のある人は、手足が不自由であったり、上手くしゃべれなかったり、出来ないことがあります。内面はどうでしょうか。内面は、障害のない人と全く変わらないのではないのでしょうか。障害のある人も、うれしいと思うこと、悲しいと思うこと、楽しいと思うことはごく普通のことであり、当たり前なことだと分かりました。自分が、生きることは楽しい、私は幸せだと思えるのなら、それで良いのだと感じました。しかし、社会の中には「障害のある人は可哀想だ」という人や、障害を持っていると分かたら、途端に距離を置こうとする人がいます。そのように思う人は、人間に対して完璧な存在を目指しているのでしょうか。障害があるかないかで判断する社会に私は疑問を感じます。社会には様々な人がいるからこそ、様々な個性が生まれ、世界がカラフルになっていくのだと思います。だから、まず障害のある人について知ってもらいたいです。そして、少しでも障害のある人について理解してくれたらうれしいです。